

会議・視察報告

中国における地域発展戦略の実施現場を歩く —チベット自治区・雲南・貴州視察報告—

ERINA 調査研究部研究主任 穆堯芋

筆者は、中国の地域発展戦略実施の現地調査を続けている。2014年2月、北京経由でチベット自治区ラサ（拉薩）市・雲南省昆明市・貴州省貴陽市を訪問した（図）。海拔3,700メー

トルにあるラサ市では、夜には激しい高山反応があったが、不思議なことに昼間はとても元気で、仕事はまったく影響を受けなかった。以下、訪問の時間順に視察報告を行う。

図 ラサ市・昆明市・貴陽市の位置図



出所：© 2014 AutoNavi, Google, SK planet, ZENRINより作成

1. 自立的な発展を目指すチベット自治区

北京からラサまでは、T27便列車に乗って44時間を要する。列車は夜8時に北京から出発し、河北省石家荘市・山西省太原市を経て、翌日の朝に起きると寧夏回族自治区中衛市に着いた。午後1時に甘肅省蘭州市、4時に青海省西寧市に着き、3日目の朝2時に格爾木（ゴルムド）市に停車した。その日の午後1時にチベット自治区那曲（ナクチュ）市に着いて、4時過ぎにラサに到着した。格爾木からラサまでの青海・チベット鉄道は2006年に開通され、世界でも海拔の高い地域での厳しい自然条件の中で工事を施行し（写真1）、中国政府の西部大開発の目玉プロジェクトとし

て注目された。西寧～格爾木鉄道は1984年、蘭州～西寧鉄道は1959年に開通されている。筆者は寝台席で格爾木在住の4人家族と同じ部屋となり、約30時間を共にした。一家の父親は青海省で探鉱の仕事をしている人で、日中はサンプル石を背負って山を歩き、夜は山奥で仲間と臨時テントを張って泊まっているなど、現場の話をしてくれた。

高山反応

高山反応が出たのは、2日目の夜からだ。列車は青海チベット高原に上り、酸素や空気圧は次第に減少し、頭痛・目まい・吐き気などの症状が徐々に現れた。夜半過ぎ

になると、症状は急速に激しくなり、居ても立ってもいられない状況になった。抑えられないほどの頭痛と高原を上る列車の振動と相まって、寝どころか時間が経つのが遅い恨みばかりで、振動数を数えながら眠れない時間と闘った。列車は3日目の午前に青海省とチベット自治区の境界線を越え、海拔5,000メートル以上のタングラ峠付近を通過した時に、高山反応はピークに達した。車窓の風景を撮ろうと思って、カメラを取り出して液晶画面を見るだけで激しい吐き気に襲われた。車内の酸素供給口(写真2)から冷たい空気が出ており、それに向けて深呼吸した。症状はその冷たさで一時的に緩和されるが、数秒で元の状態に戻ってしまう。車内加圧や酸素供給の効果は体で感じる事ができなかった。その後列車は徐々に高度を下げ、高山反応もすこしずつ緩和されたが、ラサ市に着くまで本を読むことすら、まして仕事などできる状態ではなかった。

しかし、ラサ市に着くと、不思議なことに元気が戻った。午後4時に到着し、重い荷物を運んで駅を出て、迎えに来てくれた現地の車に乗った。ホテルに着いてしばらくしてから政府担当者との面談が始まり、意気投合して面談は1時間半に及んだ。翌日の朝から調査が始まり、一日中歩いたりヒアリングをしたりして、夕食が終わるまで休むことなく動き続けたが、体には何の問題もなかった。ラサに着いたら多く話さず、一兩日は休むようにとアドバイスされたが、大丈夫だった。夜は相変わらず辛くて眠れないが、日中になると高山反応がなくなり、寝不足の疲れも感じずに仕事することができた。結局滞在中の3日間にまとまった睡眠は一度も取れず、チベットを離れて雲南省に入った途端に、巨大な疲労感に襲われた。

自立的な発展を目指す経済政策

筆者は内陸部で経済発展の負の側面(深刻な大気汚染、渋滞、過度の資源開発、地域住民の不満など)を見てきたので、チベットは最後のグリーンゾーンであろうという期待感があった。北京の学者と議論しても、チベットの綺麗な自然、少ない人口、独特な文化、ゆったりした住民生活などに対して強い憧れがあることが分かる(写真3)。ポタラ宮に上ってラサ市内を見渡すと、街は閑散としており、高く密集するビルもなければ煙を出す煙突もない。綺麗な青空が広がって心理的な圧迫感を全く感じない(写真4)。チベットは豊富な鉱物資源を有しているが、現地政府は環境や社会への影響を考慮し、その開発に関して極めて慎重である。ヤク(ウシ科の家畜)などの地域産品も一部あるが、沿海部のような大規模な処理能力を持つ肉食加工設備を導入すると、ヤクの頭数は激減し、資源としてあつ

という間になくなってしまふ恐れがある。2014年4月現在、全国31省(直轄市・自治区を含む、以下同じ)のうち、中央政府承認の省レベル地域発展戦略が存在しない地域はチベット自治区のみである(環境保護関連を除く)。チベット自治区は、過度の経済開発を迫せず、質の高い住民生活が維持できればそれでいいという議論も存在している。

しかし、現地を訪れると、チベット自治区にとって自立的な経済発展の実現は極めて重要な政策課題であると分かった。2013年、チベット自治区の地方財政収入の110億元に対し、地方財政支出は1,014億元となり、地方財政支出の約9割が中央政府の財政支援に依存している状況である(2013年チベット自治区国民経済と社会発展統計公報より)。地方政府による財政支出は、中央政府と協議する必要がある部分も非常に多く、地方財政の自立性は弱い。2012年にチベット自治区のGRP(域内総生産)は701億元で、広東省の約80分の1に相当し、全国最下位であった。2012年末にチベット自治区の総人口は308万人(全国比2.3%)、広東省の約3分の1に相当する(中国統計年鑑2013年版より)。チベット自治区は、インフラ整備の強化及び重点建設プロジェクトの実施などを通じて、自立的な経済発展と地方財政力の強化に取り組んでいる。チベット日報2012年1月12日の記事によれば、チベット自治区は中央政府の支援の下、第12次5カ年計画期間中(2011~2015年)に226件の重点プロジェクトを実施し、1,931億元の投資を行う計画である。これらのプロジェクトは住民サービスの改善、インフラ整備、特色のある産業の発展、環境保護等の分野に当てられる。例えば、青海・チベット鉄道の延長線であるラサ~日喀則(シガツェ)鉄道の建設、地方都市の林芝市の空港拡張工事、蔵木水力発電所の整備、チベット薬の産業支援などが挙げられる。チベット自治区政府は、市場経済が大きく発展する前提条件として交通・電力・情報などのインフラ整備に力を入れており、住民に対する公共サービスを徐々に改善しながら、着実に地域産業の育成に取り組んでいる印象を残った。長い道のりであるが、じっくり取り組んでほしい。

チベット自治区に中央政府承認の地域発展戦略がまだ存在しない(環境保護分野を除く)理由について、さまざまな見解がある。チベット自治区の発展が全体的に遅れているため、中央政府から見れば、他省と比べて特徴的な分野はなく、多様な地域発展モデルの形成を目指している現在の地域発展戦略には適応しないという議論がある。また、チベット自治区はすでに中央から別格の支援を得ているから、改めて中央政府の承認を申請する必要はないとの主張もある。例えば、中国共産党中央委員会と國務院は1980年

写真1 鉄道脇の土木保持・防砂工事



筆者撮影

写真2 T27便列車の酸素供給口



筆者撮影

写真3 北京人が望むチベットの姿



筆者撮影

写真4 ポタラ宮から見るラサ市



筆者撮影

写真5 立ち並んでいる冬虫夏草の店



筆者撮影

写真6 半茹の麺と「麻花」の組み合わせ



筆者撮影

代から現在まで、チベット自治区を対象にした専門会議を5回にわたって開催し、チベットの経済社会の発展に具体的な支援策を行ってきた。このような「待遇」は他の地域にはない。筆者は、無理に地域発展戦略を作る必要はないと考える。経済政策としての地域発展戦略は、市場の力と合わせてはじめて効果的に実施されるが、現在のチベットではそのような政策分野を見つけることは容易ではない。特に、無理に地域の経済的特徴を作り出し、それに関連する地域発展戦略を中央政府に認めさせ、結局地方政府の力で強引に実施することは望ましくない。地域発展の方向性と目指す姿を十分に検討し、GRP成長より真の地域産業の発展、

雇用の拡大と住民生活の向上のために施策してほしい。幸いなことに、チベットではこのように落ち着いて実効性のある政策をじっくり検討する雰囲気が感じられたので、安堵した。

ラサでは、市場経済の動きを感じる場所があった。早朝に散歩で歩行街を歩くと、冬虫夏草を販売する店が非常に多かった(写真5)。冬虫夏草は冬が虫で、夏に草に化ける天然茸の一種であるが、人間の精気を回復させて肺・腎を強める貴重な漢方薬で、近年極めて高級な贈答品として流行している。チベット自治区の那曲市は冬虫夏草の産地であり、農牧民はそれを採取してラサに持ち込み、市内の

店で販売を行っている。北京・上海・広州など大都市のニーズも多いため、那曲市の農牧民は沿海部の都市に出て、自分で店を開くケースも多い。中国の巨大な市場をつかむことによってビジネスを成功させ、外国産高級オフロードカーを何台も持つほどの金持ちになった農牧民もいるという。しかし、冬虫夏草の販売は流行に大きく左右されており、流行が終わればこれらの店も姿を消すことになろう。

現地では出会った人々

今回の調査では現地の多くの人と出会い、それも大きな収穫となった。地質学の専門でチベットの地質調査を史上初めて行うという夢を持って内陸部から移住してきた父親を持つ現地政府の高官、彼は、今、北京とラサの間を行ったり来たりして、父親から受け継いだチベット発展の夢を持って奔走している。風邪を引いた時でもチベットに帰らなければならない時があるという。チベット自治区の地方都市に生まれ、懸命な努力を経て北京の名門大学に入り、卒業後に大都市に就職するチャンスがあったにもかかわらず何の躊躇もなくチベットに戻り、この地域の発展に力を注いでいるチベット族の中堅幹部もいた。彼はほぼ毎日残業しており、自分の故郷が中国の他の地域のように良い発展を遂げるように頑張っている。また、北方の出身で沿海都市の大学で学び、チベットに憧れて四川省成都市からラサ市までの2,000キロ余りを自転車走破し、旅行中に海拔4,000メートルの山をいくつも越え、20日間かかったという漢族の若者、彼は地理に精通し、チベットの壮大な自然と豊かな文化に惹かれてチベット自治区政府に就職した。彼と話をすると、「80後」（1980年代以降に生まれ）と呼ばれる自己中心で夢もなければ努力もしない若者は、中国に存在しないかのように錯覚する。多くの人々と出会ったおかげで、旅の充実感が得られた。

ラサは気圧が低く、水は85度ほどで沸くと言われているため、ゆでた麺は硬くて白っぽく見える。強い紫外線で健康肌をしているチベット族の女性店員は、私が注文した「花巻」（小麦粉を使った柔らかい蒸しパン）を「麻花」（小麦粉をこねて油で揚げた硬い菓子）に聞き間違えたようで、その日の夕食は大変ユニークなものとなった（写真6）。それぞれおいしかった。女性店員の中国語のアクセントは硬かったが、素朴な性格で暖かく迎えてくれた。

これまで多くの地域を回ってきたが、チベット自治区は、特別であった。

2. 市場経済の浸透に翻弄される雲南省

北京から見る雲南省は、遠い国境地帯、貧しい山岳地域、

少数民族集中居住地帯というイメージであろう。雲南省はベトナム・ミャンマー・ラオスと国境を接し、4,060キロの国境線を有し、全国で最も長い国境線を持つ省の1つである。平均海拔は約2,000メートル、山地・高原面積は全省の94%を占める。25の少数民族を有し（写真7）、雲南省人口の33%に相当する（1,545万人、2011年）。少数民族自治を行う地域は面積で計算すると70%を超える（雲南省政府ホームページより）。

雲南省には、①「雲南国家観光総合改革試験区」（2009年4月）、②「雲南省を西南開放の重要な橋頭堡として建設を加速させることを支持することに関する意見」（2011年5月）、③「烏蒙山特別貧困集中区の地域発展と貧困扶助規画」（2012年2月）、④「滇西辺境特別貧困集中区の地域発展と貧困扶助規画」（2012年12月）等の中央政府承認の地域発展戦略がある。①は雲南省の豊富な観光資源を活用し、観光産業の改革と発展を試みる発展戦略である。②は東南アジア・南アジアとの経済協力を促進し、雲南省経済の国際化を促す地域戦略である。日本でも注目されているメコン川流域の開発に関連するものである。③と④は貧しい少数民族集中居住地帯等に対する貧困扶助規画である。雲南省の地理的・経済的・民族的特徴に基づいて開発政策を行っている。これらの規画の一部は、昆明都市規画展示館に展示している（写真8）。

現地を訪れると、雲南省の経済発展に厳しい現実があることが分かった。中国で急速に浸透している市場経済に翻弄されている側面が非常に多い。典型的な例は冶金工業である。雲南省は「非鉄金属王国」と呼ばれ、埋蔵量が全国トップ10に入る鉱種は61種、うち鉛、亜鉛、スズ、リン、銅、銀等の25鉱種は全国トップ3に挙げられる（雲南省政府ホームページより）。冶金工業は計画経済時代に雲南省の産業の柱であり、大規模な冶金工場や鉱山が多数存在していた。改革開放前に、昆明市の西側に冶金工場の集積地ができて、冶金に関する産業チェーンが形成され、採掘・加工・生産・販売に携わる技術者や管理者も多かった。しかし、改革開放の後に市場経済が導入され、雲南省は沿海地域と比べて技術・資金・人材の面で不足するようになり、資源を持つ以外の優位性を次第に失った。冶金工業の技術革新は多額な設備投資を必要とし、高度な部品を生産するにはハイテク技術が不可欠である。製品の販売価格は国内・国際市場の変動の影響を受けやすいため、販売ノウハウや経営力も問われる。これらの分野において雲南省は比較優位性を持っておらず、採掘以外の部分は次第にほかの地域に取られるようになった。現在の雲南省の冶金工業は、沿海地域と比べて企業の規模が小さいほか、自主性の高い産

写真7 街角の少数民族の紹介ポスター



筆者撮影

写真8 昆明都市規画展示館の外観



筆者撮影

写真9 観光客で賑わう昆明市内



筆者撮影

写真10 瀾滄江とシーサンパンナ大橋



筆者撮影

業チェーンではなく、他地域の大企業の採掘工程の一部として組み込まれており、高度な加工や販売について他地域に依存している状況であると指摘されている。一部であるが、現地政府の支援の下でハイレベルな製品を生産している企業もある。

冶金工業が市場経済の波に飲み込まれる中、1980年代に入って現地政府が打ち出したのは、煙草産業の振興であった。雲南省は暖かい気候に恵まれているほか、降雨量・日照・標高・地形・土壌等の面で煙草の成長に適しており、煙草栽培の伝統がある。1982年に雲南省煙草会社が設立され、煙草産業は専売体制の下で急速に発展するようになった。雲南省政府は海外からの優良な品種の導入を促すほか、煙草を栽培する農民への優遇政策を強化した。煙草生産企業の技術革新を積極的に推し進め、海外から当時の最新鋭設備を次々に導入した。煙草の品種改良・加工技術に関する研究を強化し、栽培面積を拡大させると同時に製品のブランド化に力を入れる等、トータルな支援を行った。この戦略は見事に成功し、雲南省の煙草産業は全国トップに上り詰めた。1986年から1995年にかけて、雲南省の紙巻煙草生産量は全国の20%、利潤額は同49%を占めた。1988年、

國務院は著名な煙草ブランド13件に対して販売価格設定権を企業に委ねる通達を出したが、うち雲南省のブランドは「石林」、「紅塔山」、「阿詩瑪」、「玉溪」、「紅山茶」など9件も含まれた。1998年に雲南省の煙草関連税金収入は380億元、地方財政収入の約80%に相当した¹。現地政府の強力な推進がなければ、内陸部である雲南省はこのような産業育成はあり得なかったと現地の専門家は指摘している。しかし、近年の雲南省の煙草産業をめぐる国内外の情勢は大きく変化しており、現地政府の危機意識が高まっている。例えば、中国人の健康への関心が高まり、禁煙運動が展開されるようになり、煙草の消費量が今後減少する恐れがある。雲南省の煙草産業は他の地域・ブランドからの厳しい競争に晒されるようになった。また、先進国の煙草消費が縮小しているなか、中国をはじめ発展途上国市場をめぐる国際競争は今後一層激しくなる。雲南省の煙草産業は、かつての冶金工業のように市場経済の浸透によって衰退することを何としても避けたい。

観光も雲南省の一大産業であるが(写真9)、地方に落ちるお金は極めて限定的であると指摘されている。地元の観光産業にとって、観光客の交通費・宿泊費・土産代は重

¹ 雲南省档案局社会利用处「輝煌之路啓示録－档案中的雲南煙草發展歷程」、雲南档案、2013年第5号。pp.18-22

要な収入源であるはずだが、雲南省の場合は状況が違うようだ。例えば、交通費としての航空代金は地方ではなく国有企業の航空会社に支払われる。宿泊費は現地のホテルに支払われるが、ホテルの経営者は広東・福建・四川からの投資家が多く、雲南人は少ないという。土産物も雲南省で生産されたものではなく、雲南省の原料を使って他の地域で加工され、再び雲南省に持ち帰って販売されるものが多い。筆者が買ったプーアル茶も四川省成都市で生産されたものだった。また、少数民族の傣（タイ）族の伝統工芸品として、銀で作られた綺麗な装飾品も地元産ではなかった。競争意識の薄い傣族にとって、銀の装飾品は親からもらうものであり、もともと売るものではなかったようだが、観光産業の発展につれてこれを販売するようになった。当初は地元の職人が丁寧に手作りをして、商品も極めて高い値段で売られていた。すぐに沿海地域の工場で大規模生産が始まり、粗末な商品が大量に供給された結果、価格が急落した。模造品も出回るようになり、雲南省に対する観光客のイメージは大きな影響を受けた。傣族の伝統文化が市場経済に翻弄されている姿が浮き彫りとなった。近年、雲南省政府は国の支援を受けて改善策を打ち出している。

雲南省を訪れて強く感じたのは、専門的知識もなければ豊富な資金・人材もない地域にとって、市場経済が持っている意味は沿海地域とまったく相違している点である。競争意識の薄い地域住民はこの波にうまく乗れず、現地政府の役割は決定的に重要である。雲南省は種々の課題を抱えているが、煙草産業の発展を成功させた実績を持っており、その経験と教訓を生かしてほしい。

日本で広く注目されているメコン川流域の開発について、現地では異なる反応があった。現地の専門家は、雲南省にとってメコン川流域の開発は経済成長の原動力となることは当面難しいと指摘した。雲南省と隣接している国はいずれも規模の小さい発展途上国で、特に国境を接している地域はその国においても立ち遅れた地域である。ミャンマーにおいては、北部のカチン族とミャンマー政府軍との政治的・軍事的緊張関係が続いており、雲南省と経済交流を行うには限界がある。いくつかの国際輸送ルートは新規に開通されているが、商流不足・通関効率・インフラ整備等の問題が存在し、荷物が順調に流れているわけではない。東南アジアとの協力においては、複数の港を持っている隣の広西チワン族自治区と競争しなければならない状況である。メコン川の水資源の利用をめぐる、上流地域の中国と下流地域のラオス、タイ、ベトナム等と意見が対立する部分もある。筆者も別の機会を利用して国境地域のシーサンパンナに行ったが、メコン川の中国部分である瀾滄江を見

て、国内では荷物を載せる船が行き来できる水量ではないと実感した（写真10）。

3. ビッグデータ産業の発展を促す貴州省

日本では、中国の地域格差を説明するときによく貴州省の事例を取り上げて、一人当たりGRPが上海市の12分の1だと言われている。省都貴陽市で見たのは、高層ビルが林立して急速に発展している部分もあるが（写真11）、大半の旧市街はやはり1990年代によく見られる古い都市の風景であった。5階、6階の住宅ビルは道路の両側に立ち、1階にはけっして綺麗とは言えない飲食店の看板が並んでいる。電柱は道路の両側に立てられ、見上げる空は電線に分断される。雨が降ると道路がドロドロになり、少ない歩行者は道のデコボコに注意しながら慎重に歩く。街の発展は遅れている印象だが、妙に情緒があった（写真12）。

貴州省には、「黔中経済区発展計画」（2012年8月）、「貴州貴安新区設立への同意に関する返答」（2014年1月）等の中央政府承認の地域発展戦略がある。エネルギー工業、機械産業、都市の一体化、観光産業の発展を促している。貴陽市と安順市の間に立地する「貴安新区」の設立が国務院に承認されると、電子産業を中心に大規模な開発プロジェクトを実施するようになった。貴州省には低くて緩やかな山が多いため、コマツの建機が山を登って岩を削り、平らな地を作ろうとしている（写真13）。人間の活動の遅しさを感じた。

貴州省の最近のホットな話題は、なんとビッグデータである。ビッグデータは巨大で複雑なデータの集合体であるが、それを適確に解析することにより新たな情報価値を生み出すものである。日本では大震災が企業間の取引に与えた影響の分析に利用されたことが知られている。貴州はビッグデータ産業を発展する優位性があると言われている。貴陽市の年間平均気温は15度、冬も夏も極端な気温変化はなく、サーバーの保存に適している。台風・地震等の自然災害はなく、データ保管・処理の安全性が高い。電力供給も安定的である。貴州省政府は、貴安新区を中心にビッグデータに関連するプロジェクトの認可、企業に対する税金・資金面の支援、市場の育成及びハイレベル人材の導入等において、種々の優遇政策を打ち出している。

2013年、情報分野のビッグスリーである中国電信、中国移动、中国联通が相次いで貴安新区に進出し、大規模なデータ処理センタープロジェクトを開始した。クラウド・コンピューティングセンターの整備を中心に、合計140億元の投資を行う予定である。電子機器大手のフォックスコンも貴安新区への投資が決まっている（貴州日報2014年1月28

写真11 急速に発展している貴陽市



筆者撮影

写真12 貴陽市の旧市街



筆者撮影

写真13 貴安新区の開発工事



筆者撮影

写真14 貴陽市内の手作り肉餅屋



筆者撮影

日より)。貴州省政府2014年2月に「貴州省のビッグデータ産業の発展と応用に関する規画要綱（2014-2020）」を公表し、2020年までにビッグデータの産業規模を4,500億元、20万人の雇用を確保することを目指している。ビッグデータ産業は新しいものであり、地域間競争も予想されるため、将来性について未知の部分も多い。

貴陽市内には、家族経営の小さい飲食店が数多く残って

いる。職人たちは金銭の欲に染まることなく、より良いものを客に提供することに没頭している。手作りの肉餅屋では、職人は熱い油から手で餅を取り出すが、やけどすることなく仕事を続けている。材料も丁寧に工夫されている(写真14)。貴州の人々には安らぎの気持ちがあり、古き良き中国の面影があった。